

Report

# 杉浦非水 作品資料調査

松山市出身で近代日本におけるグラフィックデザインの先駆者として知られる杉浦非水(1876~1965)。当館では非水を梟ゆかりの重要作家の一人として位置づけており、ご遺族からも2千点余りの作品資料の寄贈を受けるなどして、充実したコレクションを持っています。

その内容は、ポスター、雑誌や書籍の装丁など非水の手がけた作品だけではなく、スケッチ、写真、書簡や日記、日用品(遺品)や画材など多岐にわたります。

これらは、作家のことや当時の文化を鮮やかに語ってくれる興味深いものであり、調査研究の上でも非常に重要な資料です。しかし、その中には従来の美術館の、作品の様式や素材を基準とする整理分類の体系になじまないものも多く、整理と保存についてかねてより課題となっていました。

今年度、同じく非水の資料を所蔵する東京国立近代美術館工芸館、宇都宮美術館と共同で助成金をいただき、非水の作品及び資料の整理分類の方法について他館の事例調査や研究会を行いました。同時に、当館所蔵の非水資料について整理作業と目録作成を進めています。

こうした資料整理と保存管理は、博物館(美術館)の最も重要な機能の一つでありながら普段表舞台に出ることは多くありません。さらに、一点一点内容を確認して撮影・採寸、資料番号をつけて箱に戻していく、という作業は想定以上に時間がかかる地道なもの。しかし、今回の調査と非水資料の整理を機に、資料を適切なかたちで保存し、次の世代に伝えていくことは博物館の土台となる活動であるということを改めて実感しています。この成果は当館の紀要や展示などで順次公表・活用していきたいと思っておりますので、今後どうぞご期待ください。(H.Shi.)



博物館学実習に来た実習生の皆さんにも整理作業を体験してもらいました。

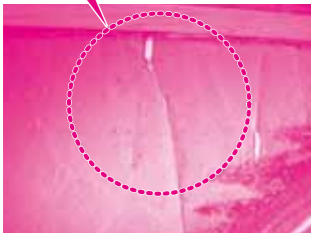


今夏の企画展「おくらだし」展では整理作業で見出された非水の収集品などを展示しました。

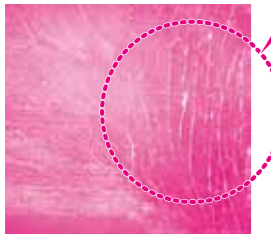
ちょっとひととき

## Column 作品保存のおはなし『触らない!』

ヒビが入るとその後、絵の具が浮き剥落が始まります。



上部の波状紋は、枠を持った際に裏から指が当たった跡です。



美術館では、学校団体で来館された際に、普及係員が展示会の概要や鑑賞の注意事項をお伝えしています。多くの注意事項の中から、その団体の年齢や展示会に併せ、3つに絞ってお話をしますが、必ず入る一項目があります。それが、「触らない!」

鑑賞者の方も重々ご承知のこの項目ですが、展示室でお声をおかけすることも多いのも、この「触る」という事項になります。私自身、思わず触ってしまいたくなる作品があります。「これは何だろう?!」と思った時、思わず手が動いてしまう経験はないでしょうか?

作品を傷つけないように触ったとしても、実は作品に大きな影響を与えてしまうことがあります。弱いとされている紙の作品でも、思わずそっと触ってしまった一回では影響がでないように思えますが、私だけと思う多くの方々一回が数回、数十回になり、汚れや擦れによる紙の劣化につながります。また油絵のような一見頑丈そうな作品においても、触ることで、数年後にさざなみのようなヒビが入り、徐々に進行し、そのヒビから絵の具層の剥落を引き起こすこともあります。お寺や神社の石段でも、大勢の方が歩かれた跡は磨り減っています。自分一人なら大丈夫と思っても、作品は何十年、何百年の時を経て保存されるため、劣化の大きな原因になりえるのです。

油絵の具も50年経てば、油分が抜けて化石化していると言われます。皆さんの大事な作品です。「触ってみたい!」気持ちをグッと抑え、じっくりと観察することで読み取っていただきたいと思えます。(A.T.)

### ご利用案内

- 開館時間 9:40~18:00(入室は17:30まで)  
※企画展及び貸展については、入室時間が異なることがあります。各展示会のページでお確かめください。
- 休館日 月曜日  
(祝日、振替休日及び第1月曜日に当たる場合は開館し、その翌日が休館日)



# 愛媛県美術館

〒790-0007 愛媛県松山市堀之内  
TEL 089-932-0010 FAX 089-932-0511  
<http://www.ehime-art.jp/>



# Canforo 43

カンフォロ

愛媛県美術館ニュース No.43 2012

執筆者  
(T.I.)稲田 哲也 (Y.S.)鈴木 有紀  
(T.N.)長井 健 (A.T.)田代 亜矢子  
(H.Shi.)嶋原 悠 (M.I.)石崎 三佳子

## 企画展 1

~日中国交正常化40周年記念~

# 地上の天宮

# 北京・故宮博物院展

平成24年2月9日(木)~3月18日(日)

開館時間 9:40~18:00(入場は17:30まで)

■ 休館日: 月曜日(ただし、3月5日は開館し、翌日が休館)

中国・北京市にある故宮博物院は、かつて紫禁城と呼ばれ、1368年から約550年にわたって、中国明・清両王朝の歴代皇帝のうち24人が居住した世界最大の宮殿遺構として知られます。乾隆帝、西太后、そして「ラストエンペラー」溥儀といった権力者たちの名とともに、建造物の壮大な威容を思い起こされる方も多くでしょう。

日中国交正常化40周年を記念して開催される本展覧会は、約180万点にもぼる北京・故宮博物院の貴重な所蔵品の中から、絵画・工芸・服飾・宝飾など、日本の国宝に相当する「国家一級文物」を含む約200点を厳選して、中国宮廷文化の精髓を紹介するものです。展示では、特に后妃や宮女といった故宮に暮らした女性たちにスポットを当て、彼女たちの肖像画やその生活や風俗がしのばれる絵画、実際に使用したり身に付けたりしていた工芸品、服飾・宝飾品などを通して、その波瀾万丈の生涯やまなざしに迫ります。また、特別出品として、儒教思想に基づく女性の徳と教育をテーマに描かれた南宋時代の《孝経図》巻が、海外初公開となるのも、大きな見どころです。その他、西太后をはじめ皇后・后妃たちが用いた食器により、清朝宮廷の豪華な食卓を会場で見学するなど、故宮博物院でも行われたことのない画期的な展示も予定しています。

美しい文物を鑑賞しながら、中国の歴史が育んできた宮廷文化を深く理解するとともに、「地上の天宮・故宮」の魅力をも十分に堪能していただければと思います。(T.N.)

### ◆関連イベント

#### 記念講演会

- 講師: 五木田 聡 氏(東京富士美術館館長)
- 日時: 2月9日(木) 13:30~
- 場所: 南海放送本社1階  
テルスターホール  
※当日先着350名 ※申込不要・参加無料

#### フロア・レクチャー

- 講師: 東京富士美術館学芸員
- 日時: 毎週火・金曜日 14:00~
- 場所: 企画展示室  
※企画展観覧券が必要です。※申込不要  
※3月6日(火)は休館のため、3月5日(月)に実施

#### 企画展講座「故宮博物院の世界」

- 講師: 当館学芸員
- 日時: 2月18日(土)、3月3日(土) 14:00~
- 場所: 新館2階[研修室]  
※当日先着50名 ※申込不要・参加無料

#### 対話型ギャラリートーク

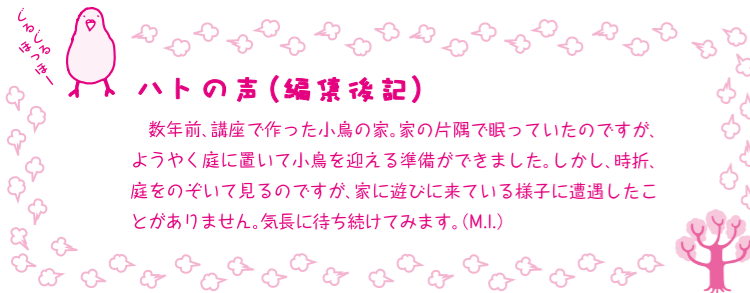
- ナビゲーター: 当館ガイドボランティア
- 日時: 毎週日曜日 11:00~
- 場所: 企画展示室  
※企画展観覧券が必要です。※申込不要



(慧賢皇貴妃朝服像)/ 乾隆帝皇貴妃の肖像 清



清朝宮廷の食器セット(展示イメージ)



### ハトの声(編集後記)

数年前、講座で作った小鳥の家。家の片隅で眠っていたのですが、ようやく庭に置いて小鳥を迎える準備ができました。しかし、時折、庭をのぞいて見るのですが、家に遊びに来ている様子に遭遇したことがありません。気長に待ち続けてみます。(M.I.)

# その1 実技講座「銅版画の楽しみ」

1回目 6/18(土)・19(日)  
2回目 8/20(土)・21(日)



今回の実技講座は「エッチング(銅版画)」でした。エッチングとは、金属板(通常は銅板)の表面を防食膜で覆い、その膜を引いた部分を塩化第二鉄などの溶液に浸し腐食します。そして、できた凹部にインクを詰め、圧力をかけて紙に転写する版画技法です。大変繊細な表現ができ、味わいのある技法ですが、手順が若干複雑なため愛媛でも取り組んでいる方は少数です。

さて、当日の様子です。まず下絵を紙に描く作業から始めました。人の顔や鳥など具体的に表現する方、画面いっぱいに花模様をデザインした方など、多彩な下絵が出来上がりました。その後銅版へ転写し、ニードル(鉄筆)で線になる部分を削っていきます。この作業が最も時間のかかる工程です。半日ほど削っては腐食液に浸し、線の深さを確かめてまた削る。この根気の要る作業を、皆さんすばらしい集中力でやり抜きました。そして、いよいよ印刷です。版画をしていて最も心躍る瞬間です。結果は? やった! 大成功。楽しい作品が多数完成しました。今回は中高生にもたくさん参加していただきました。新しい表現方法に触れ、嬉しそうに顔を輝かせていた姿が印象的でした。(T.I.)



# その2 美術体験講座「カードを作ろう」

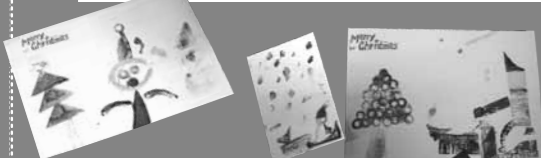
11/23(水)・12/4(日)



クリスマスやお正月を迎える季節。講座で季節のご挨拶状になるカードを作りました。

カード作りに用いたものは、木端(木材の切れ端)。木端でカード? と不思議に思えますよね。実は木端をそのまま版として使うのです。いろいろな形の木端の断面に絵の具を塗って、紙にスタンプし、絵を構成していきます。木端の切り口は形も様々。その上、人の見方も様々。たかが木端、されど木端で、思いもよらぬ使い方で、素敵な図案のカードが次々と出来上がりました。難度の高い干支の籠に挑戦する参加者もあり、作り手により使う木端も違うため、完成する籠もそれぞれ個性的で、参加者の発想に感心し通してました。今回、絵の具の色は基本の赤・青・黄の3色を用意し、参加者がほしい色を混ぜて作ったのですが、その色作りも楽しまれていました。親子での参加も多く、互いの木端や色の使い方にヒントを得ながら、取り組んでいる姿もみられました。

木端を手にもその形から想像を膨らませ創作された、世界に1つだけのカード。こうして出来上がったカードが誰かの手元に届き、また、楽しい会話が広がる様子が目に浮かびます。(M.I.)



## アトリエから 木工利用者 紹介

黒田さんの作品は、アトリエや新館の図書コーナーに寄贈いただき、飾っています。



アトリエには制作のためのいろいろな道具、機材が設置しており、個人の制作に様々な方が利用しています。中でも電動糸鋸や卓上ボール盤を使った木工工作の利用は、以外と女性でも簡単に使えるので、男女問わず利用があります。

その木工利用者の1人として、オープン当初から長年利用いただいているのが黒田宏さん。黒田さんはいつも黙々と糸鋸に向い、自分の仕事をこなしています。糸鋸を自在に操り、どんな複雑な形も見事にカットし、木工利用の中で一目置かれています。

黒田さんは小学校の教員を勤めていたとき、授業で糸鋸を使ったのが、木工工作を始めるきっかけだったそうです。糸鋸の使い方など誰に教わることなく、独学で技術を習得。公募展での受賞、児童館や福祉施設などでの指導といった経験を持ち、糸鋸を自分で購入しようと思っていたとき、美術館のアトリエを知り、アトリエ利用が始まりました。

週に3、4日の頻度で利用していた時期もあり、次々とパズルや小物を作っては人に差し上げていて、ほとんど手元には作品は残っていないようです。形にこだわり、切っては修正を加え、誰がみてもわかる形を心掛け制作に取り組みます。アトリエの機材のことはスタッフより精通しており、機材の調整をしてくれたり、ほかの利用者が扱いなどに困っているときはアドバイスをしてくれたりします。自由自在に使えるアトリエは黒田さんの制作スタイルに合っており、自分のペースで創作を楽しみます。その一方、自分が身につけた技術や情報を、惜しまず他の利用者に提供し、アトリエを陰で支えている貴重な利用者の一人です。(M.I.)



先日、愛媛県美術館友の会の研修旅行に同行させていただきました。金沢21世紀美術館では、シニア世代の皆さんの、現代美術に対する柔軟性に感激。自分の頭の固さを反省した次第です。(T.I.)



### 愛媛県美術館

〒790-0007 愛媛県松山市堀之内  
TEL 089-932-0010 FAX 089-932-0511  
<http://www.ehime-art.jp/>

カンフォロ

愛媛県美術館ニュースNo.43 2012

# Canforo 43

執筆者  
(T.I.) 稲田 哲也  
(T.N.) 長井 健  
(H.Shi) 嶋原 悠  
(Y.S.) 鈴木 有紀  
(A.T.) 田代 亜矢子  
(M.I.) 石崎 三佳子



4月から当館で働き早9ヶ月。(執筆時点)新しい発見や驚きの連続の9ヶ月でした。学芸員に必要なものは体力、というかつて受けたアドバイス(?)を痛感する日々ですが、沢山動いて食べて、精進していきたいです!(H.Shi.)

## 所蔵品による特集展示 版画の魅力—情熱を刻む人々—

平成23年11月25日(金)~平成24年4月上旬(予定)

電子メールが当たり前の今、手作り版画の年賀状などを思いがけず受け取ると、何だか心がほっこりとなりませんか。版画という技法には、作者の情熱や息づかいがより身近に感じ取れる、そんな独特の魅力があります。

近代日本の版画は、「自画・自刻・自摺」、すなわち全ての工程を作家一人が手がけることを旨とした「創作版画」と、従来の浮世絵の伝統を受け継ぎ、彫師・摺師との分業体制を生かした「新版画」という2つの流れがありました。とりわけ前者は、大正時代から昭和初期にかけ、美術界全体を席卷した「個性の尊重」から生まれた動きです。愛媛の版画家たちは、おおむねこの「創作版画」の流れに位置づけられます。今回の特集展示は、これら郷土出身作家を中心に版画作品だけで構成しました。中でも、旧・三間町(現・宇和島市)出身の畦地梅太郎(1902-99)は、平塚運一、恩地孝四郎ら創作版画の中心的作家に学び、国際的にも評価されている、愛媛の近代版画史のエポックメーカーです。「山男シリーズ」をはじめとする自然を主題としたぬくもりあふれる木版画は、なじみのある方も多いでしょう。

その他、木和村創爾郎、大宮昇、石崎重利、中尾義隆など愛媛の版画史を彩る作家たち、さらに智内兄助、今井庸介など現在活躍中の郷土出身作家まで、一堂にご紹介します。木版だけでなく、リトグラフ、エッチングなど、多彩な技法とそれらが作り出す表情にも注目しながら、ご鑑賞ください。(T.N.)



畦地梅太郎「山上に叫ぶ」昭和31年(1956)

## 所蔵品による特集展示 なぞなぞ美術館V~日本美術は楽しい!~

平成23年11月25日(金)~平成24年4月上旬(予定)

美術館では4月上旬まで新館2階常設展示室3において、恒例の「なぞなぞ美術館」を開催しています。第5回目となった今年度のテーマは「日本美術」。折ることで立体感を生み、正面からだけではなく左右に視点を変えることで絵が変化する「屏風」。持ち運びが簡単で、床の間等に掛けて様々な楽しみ方をする「軸」。右から左へと巻物を動かしながら物語を楽しむ「卷子」。そして、その良さを受け継ぎつつ新しいスタイルに挑戦していく現代の日本美術の全部で4部構成となっています。

この「なぞなぞ美術館」では、ふだん、作品の横についている《キャプション》※と呼ばれる作品のタイトル等が書かれた情報カードをふせています。その代わり、これらの作品を鑑賞された方の「私の感想文」をどんどんご紹介していきます。さあ今回も、なぞなぞ美術館の中でイメージの世界をじっくりとお楽しみください。どうぞ、ありのまま作品をみていただき、「そこで何が起きているか?」どのような様子が描かれているか」について想いをめぐらせてください。

他の鑑賞者の方の感想文を読んで、共感されたり、いや、私にはこんな風に見えるよ、という感想がありましたら、ぜひお聴かせください。展示室の入口にインタビューシートを用意しております。みなさんから寄せいただいた言葉は随時、整理して作品の横にご紹介していきます。(Y.S.)



※キャプションはどうしても気になったら... 覗いてみてください。

